

メールレター(58)

年の瀬

雪が時折降る冬になりました。雪は舞いながら、クリスマスデコレーションの光を受けて輝き、ダイヤモンドが町中に降ってくるかのようです。

この時期には、毎年クレージュ(キリスト生誕の模型の人形)を飾ります。しゃれていて可愛いのは、メキシコのミニチュアクレージュです。素朴な、手描きの絵付けが心を引きつけます。南米は敬虔なキリスト教信で、救世主のイエスキリスト生誕は何より大事なのでしょう。毎年メキシコでバカンスを過ごしていた友人の贈り物なのです。クレージュの模型の人形の配置は、キリスト教信者ではない私には無理なので、ドリトル先生の出番です。この話しを友人にすると、

「あら、そういえば、三賢者も名前があるし、配置もきまっているのよね。記憶がはっきり戻らない。ちょっと待って。スマホでグーグルして確かめてみるわ。」

「御利益がなさそう。酷い信者ね。」

「これを歴史的に見ると面白いのよ。大事なのは、中近東から三賢者は来たってということよね。キリスト教はだいぶ前から存在していたようだし、回教はまだ存在しなかった頃にイエスは救世主になったということかしら。イエスが神の子というのはカトリックだけだけだ。。。」

ドリトル先生は、こんなおばさんの話は無視して、クリスマスの時期には子供の頃に戻り、新年まで(新年6日の三賢者の到着と贈り物献呈でクリスマスは終わります。), 忘れていたカトリック信者の心を取り戻します。人形を一つ一つ手にとって語りかけています。毎朝ミサに出かけ、日曜日のミサには神父の手伝いをし、パリノートルダム教会のコーラスでミサ曲を歌うなど、誰よりも教会と密着したフランスの敬虔なカトリック信者の家族の暮らしが戻ってくるようです。一時的とはいえ、ピュアな心になるようです。

マダム田中は、師走を東奔西走しております。新米ママの娘一家が、孫が保育園でひいてきた風邪をもらい全員ダウンと聞くと、お粥や食事を持って行き、義理の長男に頼まれては7ヶ月の義理孫のベビーシッターをしたりしていました。義理孫はずっと泣き続けていたのです。親に見捨てられた絶望感で、泣いてはぬいぐるみを手繰り寄せ、また泣き、これが5時間。義理孫を、ベビーサークルに放り込み、ありったけのぬいぐるみも放り込み、好きなだけ泣かせておくことにしました。なす術がありません。マダム田中はアバウトな性格なので、細かくがんばりません。親が戻ってきた時は、涙は枯れ果て、泣き疲れて眠っていました。義理の長男夫婦ですか? 何ということはありません。ハードな1週間だったので、スパで5時間たっぷりリラックスしていたのです。ドリトル先生は、遠巻きに泣く子を5時間眺めていました。マダム田中のセーターは義理孫の涙と鼻水と吐き出したミルクで無残なものでした。マダム田中こそ、スパでリラックスしたいと思うのですが。。。

そうはいきませんでした。4日後に900キロ離れたフレデリクトンに住む義理の次男の所にひとっ飛びなのでした。コロナ禍、飛行機に乗り、旅をするのは至難の技です。州境を越える許可を申請し(次男がしてくれました)、ワクチンパスポートを持ち(スマホだけでなく、念のためプリントもし(しかも二枚)、と身分証明書も持ち、旅立ちました。

三年前はコンビニかと思うくらい貧相だった空港が、モダンなガラス張りの近代的なビルになっていて、びっくりしました。フレデリクトンはニューブランズウィック州にあり、モンリオールとは1時間の時差があります。だいたい北になります。冬の今は、4時には真っ暗になり、朝は7時なってもまだ夜が明けません。英語、仏語のバイリンガルな州なのですが、実質的には英語が公用語のように大部分で使われています。二人の義理孫は、仏語教育の小、中学校に通っています。義理の次男が教えているニューブランズウィック大学の隣にあり、送り迎えは次男の役目になっているようです。

ここは、森と泉に囲まれたど田舎なのですが、森林と温暖化を研究する次男には最適な場所なようです。教えるのも研究するのも全て英語です。とはいえ、バイリンガルな州をうたっている手前、時折フランス語の研究発表も花を添えるらしく、義理の次男のフランス語の研究発表の出番があるようです。どうやら、40歳のイケメン助教授は引っ張りだこなようです。

二人の義理孫たちはエネルギー一杯です。着くなり、ピアノ(孫娘)とギター(男の子の孫)の演奏が始まり、拍手喝さいに忙しいこと。これが寝るまで続きます。翌日は目を覚ますと、銀世界が広がっていました。

「森を散歩しよう」

次男に連れられ、深い森の中です。と言っても家から車で2-3分なのですが。そびえ立つ杉の木立は雪で少し垂れ、モノクロームのトンネルを作り、妖精が踊りながら出てきそうです。いえ、間違えました。孫たちの雪玉がじゃんじゃん飛んで来たのです。出てきたのは笑い転げる孫たちでした。負けてはいられません。倍返しの雪合戦です。

翌々日は、この時期恒例のバレエの「胡桃割り人形」の観劇です。ネズミが出てきたり、様々のキャラクターが出てくるこのバレエは、世界中でクリスマスの時期に踊られる定番です。可愛く、とても綺麗です。娘を連れ、観にいていた頃のことが懐かしく思い出されます。

昔、駐在の方のお嬢様が「胡桃割り人形」のネズミ役のオーディションに受かり、踊っていたことがありました。モンリオールの舞台が終わると、カナダ各地、アメリカ各地の巡業公演があり、大変だったようです。気がつくと、娘はすっかり舞台の拍手喝采慣れをし、拍手しないと返事もしないとぼやいていたことがありました。

「その上ですよ、女房は、ステージママー筋で、不在です。」

「それは、また大変な」

「やってられませんよ。」

というわけで駐在を早々と切り上げて、帰国されてしまいました。

さて、フレデリクトンの胡桃割り人形ですが、モンリオールのグランバレエカナディアンからやってきたスターの二人のバレリーナを除くと、地元のバレリーナとバレエ学校の生徒たちでこのバレエ公演は構成されているようです。可愛く、綺麗に踊りあげていて、吸い込まれていきます。バレリーナの中に、一人体格の良いバレリーナがいて、チュチュからむっちり肉がはみ出し、飛び上がっても飛びが浅く、片足のつま先立ちをし、もう片方を高く上げると、重みで脚がやや震え、早めに着地してしまいます。あー大変そう。

さすがにメインの二人のバレリーナは完璧で、くるくると綺麗に回り、夢のようです。男性バレリーナも主役のバレリーナを綺麗に持ち上げ、さっとおろし、二人で踊りこみます。あのがっちりバレリーナだったら、重みで共倒れするかもしれませんが、さすがスターのバレエの踊りは素晴らしく、総立ちでアンコールです。楽しいひと時でした。こうして4日間が楽しく過ぎていきました。

帰りの飛行機に疲れ果てた老体を押し込み、帰宅して我が家のドアを開けた時の何たる安堵感。

旧年は色々大変お世話になりました。良いお年をお迎えください。